

平成 24 年度 第 7 回文系チャレンジ講座を開催しました

第 7 回文系チャレンジ講座が、2012 年 12 月 19 日、「問題：日本は TPP に参加すべきですか？」というタイトルで本学経済学部の大呂興平准教授の指導の下、開催されました。遠隔配信された大分雄城台・大分鶴崎・大分商業・安心院・日田の 5 校(92 名)と、来学した三重総合(7 名)・別府青山(21 名)の 2 校を合わせて、計 120 名の高校生が受講しました。

大呂准教授は、「皆さんが社会に出て直面するであろう問題は、高校までの勉強のあらかじめただ一つの解答が与えられている問題とは違い、単純な答えがなく様々な意見が錯綜する、とても複雑な問題です。そうした問題に向き合うためには、問題を客観的かつ多面的に捉えられる、確かな“見方”を身につけなければなりません。大学で学ぶことの大きな目的の一つは、こうした“見方”を身につけることです。本講義は、『日本が TPP に参加すべきか否か』といった時事的な問題を考えることを通じて、このような“見方”の重要性を実感してもらいます。」と、話しました。

講義は、「日本は TPP に参加すべきですか？」という「問題」について参加者一人ひとりが考え、考えを述べる方法で始まりました。そのうえで、自由貿易の重要性、農業保護の必要性それぞれにきちんとした理由があり、TPP 参加の是非も Yes, No という答えが簡単に出るものではないことが、理論と現実をもとに説明が行われました。

まず、なぜ自由貿易が重要だとされるのかについて、イギリスの経済学者 D.リカードの唱えた“比較生産費説”について、家事労働の分業の例えから説明を進め、国と国との国際分業を自動車・衣類を生産する労働力を例に、貿易をすることによって双方の国にとって利益が生じるという原則を理論的に説明しました。

他方、農業の保護が重要とされる理由について、(1)食料は人間の生命維持に欠かせないため、食料自給が国の安全保障に強くかかわること、(2)農業が国土の面的な保全に重要な役割を果たしていること、(3)農業には市場では評価されない価値があること、などの観点から、具体的な事例を挙げながら説明がありました。

大学で学ぶことは、「理論から学ぶこと」「現実から考えること」であり、少し客観的になれるか、視野を広げられるかという力をつけることであると、話して講義は終了しました。

受講後のアンケート調査では、「総合的に判断して良かった」(99%、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ)、「教員は真剣に取り組んでいた」(95%)、「授業内容はわかりやすかった」(96%)、「受講生は授業に意欲的に取り組んだ」(92%)と高い評価結果がでました。遠隔配信については、「音声は良く聞こえた」(92%)、「映像はよく見えた」(95%)という結果がでました。

受講生の具体的な声として、「TPP のメリットとデメリットが理解できた。」「農業の必要性を多面的に学習できた。」「また、家族で TPP 参加の是非について、話し合ってみたい。」「TPP 参加の是非について、政府の判断を注視したい。」「タイムリーな話題でとても面白い授業であった。」など、受講生の関心高さが表れていました。

